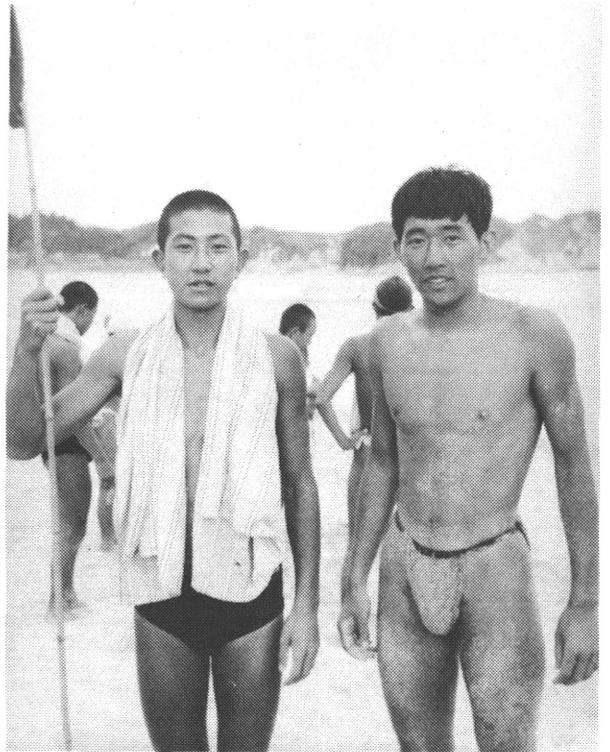


ハチとその周辺

旧高第14回 丹沢章浩
S17年卒業

ヤマハチこと山口八郎先輩（我々はもっと短かく“ハチ”と呼んでいたが）は、私の知る限り成城水泳部随一の快男児だったと思う。そしてその生涯はまことに短かった。ハチは戦争末期の昭和20年月、九州南海上に愛機「天山」と共に消えた。「天山」は日本海軍が誇る最新鋭の雷撃機で、ハチは予備学生出身としては最優秀のパイロットだった。ハチは水球をこよなく愛し、その天性は成城時代よりむしろ神戸商大へ進んでから開花した。世界中が戦争していた時代で、オリンピックはなかったが、もしあれば日本代表のハーフバックだったかも知れない。それほどの名手だった。もちろん成城時代も名物ハーフバックであった。抜群の運動神経と恵まれた体の割にはどうゆう訳か競泳（長距離）の方は余りパツとしなかったが、球を頭の前にキープして敵陣にバク進するスピードは信じられないほどで、いつぞのこと競泳のときも球と一語に泳いだ方が良いのではないかと悪口を言う奴もいる位であった。また遠投力もゆうに20米を越え、成城、神戸を通しての名コンビであったカマゾウこと守田謙三先輩の前に落とす適格なパスはことごとく得点に結びついた。カマゾウは独特の広い肩幅で、慶応の和田バケツ氏以来の名フローティングフォワードとも言われ、また競泳の分野でも高校水泳史上はじめてバタフライを登場させ、50米までは二位以下を11米も引き離す華麗さを展開し驚威の眼で見られていた。このお二



左側 丹沢章浩 右側 山口八郎

人をはじめ一年下のハマコウこと浜田収先輩や、お二人より少し先輩の、それこそ高校短距離界に無敵の存在だったカイスケこと竹尾先輩など、この時代の成城水泳部は数少ない天才によって支えられていたと言えよう。だから優勝者は出ても総合得点では東京高校や、府立高校より下位に甘んじていたように憶えている。

ハチは部の生活以外の面でも私達の先生で、良いこと悪いこと、随分教えられることが多かった。大学の夏休みには殆んど成城のプールにご出勤で我々の面倒を見てくれた。余りシゴカレた記憶はないが

遺稿

今シーズンを省みて

旧高第12回(S15年) 山口八郎

自分は、今シーズンこそ頑張る積りでシーズンアップ中も殆んど無休で帝大プールにも行き、ボロの講習会にも参加して、大いに張切って居たのだが、インターハイでは浜田がタイムを上げてくれたのでうまく行けばリレーは優勝位出来たかも知れなかったのに、自分が尋常科四年以来以前と変わらずタイムがよくなって、切角の機会を無に

して失ったのは非常に部員諸君に対して相済まなく思っている次第であり、又自分自身としても非常に残念な事であります。ボロは一年の経験で昨年よりは巧くなったが、未だ失敗をしてインターハイの府立との試合や七年制の東高等の敗戦は残念でなりません。来年こそは今シーズンの不振に奮起して成城生活の最後を飾る様に努力し、且つ水泳部としても更に一層頑張り、先輩諸兄及び水泳部の伝統を汚さぬ様立派な働きをする決心で居ます。



後列 左より

君塚英男 松浦英夫
 浜田 収 森 美秀
 須賀重興 丹沢章浩
 穂坂博明

前列 左より

中村勝男 守田謙三
 入部辰市 鈴木忠夫
 竹尾快助 山口八郎
 木村和一郎

プールサイドでの語らひは大抵余り実践的でないお色気ばなしでドギツイ表現が却ってハチの育ちの良さを表わしていた。ハチが海軍航空隊に入り霞ヶ浦基地で教育を受けていた頃、面会に行った私の前に現れたハチの顔はもう既に「神」の顔であった。同室のタコこと末弘忠夫先輩（ラグビー部）と共に、訓練の辛さ、楽しさを身体一ぱいに話して聞かせてくれたこと、今でも克明に憶えている。そのタコも一式陸攻と共に台湾沖に散った。

さて、ハチの一年下に中距離の天才泳手のハマ公がいた。ハマ公の得意は200米自由形で練習ぎらいの割には後半が強く、神宮プールで（学生選手権だったと思う）常勝の米本礼太郎氏（府立高校）をタッチの差まで追いつめたシーンを今でも憶えている。ハマ公はまたガラの悪さでも稀有の存在で、パンカラが特長の他校の白線連中の心胆を寒からしめたことしばしばであった。特に坊ちゃん紳士といわれた成城の中ではそれこそ国宝的存在であったろう。ハマ公もまた戦争の犠牲になった。

ハマ公の同期のウンチこと内山四郎先輩もまた戦争の犠牲者の一人といってよい。終戦後間もなく亡くなった。彼はやはり中距離泳者だったが、どちらかという水球での活躍が目ざましかった。地味ながらいつもチームの要になっていた。

ハマ公、ウンチの同期には、秀才の誉れ高かったホーチンこと穂坂先輩やフリーからバタフライまで何でもこなす雨宮先輩、ホッケー部から夏だけ助っ人のモテ男バイちゃんこと松浦先輩など多士オタ、そして個性豊かであった。

私達の時代になり水泳部も随分人数が減り、水球のメンバーにこと欠くようになってしまったが、それでもゾウこと君塚英男君やツンボこと松前建男君などの超ド級泳者が居り、一年生の八尋、浅田、高木などのスター選手たちと共に、特に七年制制高校大会では上位に位していたと思う。そしてこの流れが戦後初のインターハイに全国優勝という成城始まって以来の快挙を成し遂げた人たちへと受けつがれていったのである。いうなれば竹尾先輩やハチ達の個性時代から次第に数の時代に入って行ったといえよう。今回の五十年史の編纂に当って私は一番想い出の深いハチのことを書かせていただいた。ハチが今生きていたらどんな初老の紳士になっていたであろうか。そんなことを考えると本当に人生の不可思議さを感じざるを得ない。

最後に、私の水泳部生活には、「ハチの周辺」とその後黄金時代を現出した小沢貞坊から始まる四年六年下の連中との楽しい共同生活があったことを附記したい。



山ハチと共に

旧高第12回
S15年卒業 守田 謙三

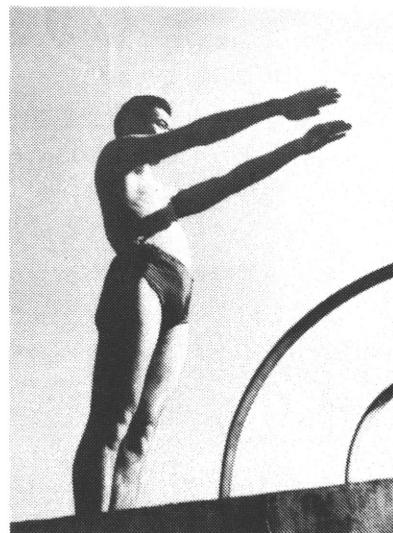
私とハチこと山口八郎君とは、尋常科中学の頃から、神戸商大まで、12年間、水泳部で、席を同じにしていました。彼がハーフバックで私がフォワード。フリースローの笛で、プレーをいちいち中断しなければならぬ当時のルールで、彼とは絶妙のコンビを組み、左ききの特典を生かして、随分と得点を稼いでいたのです。

ハチは、チームをまとめていく不思議な力があり

神戸大プール シューター・守田、GK・山口

ました。卒先垂範型ですね。短気のわりには、部内で決して、喧嘩はしませんでしたし、当時、学校で一番恐ろしかった生徒課からの呼び出しも、禪のままで行くような奴ですから、度胸は並大抵のものではありませんよ。金のない時代でしたから、部費獲得に心血を注いでいたと思いますが、苦情らしいことは一言も聞いたことがなく、全く、あの訓練機が落ちなければと、今でも思い出す度に残念でなりません。

硫酸銅をバケツでといて、プールへぶち込み、バタ足でかきまわしていたあのなつかしい時代。その水を仙川へ流して、下流のつり堀の魚をダメにしてしまった思い出も今では遠い過去の話になりました。



神戸大飛込台プールにて 山口八郎

シューター・守田、GK・山口

青春の一擲

旧高第13回
S16年卒業 松浦英夫

竹尾先輩覚えておられますか、あの時の一投を！あれは昭和13年の晩夏と云うよりも初秋の頃でしたね、ですから覚えて見ますと40年以上も前の事になります。

昔話することになりますので、水泳部に私が入るまでの水泳歴からお話しして置きましょう。想いかえして何才から泳げる様になったのか定かではありませんが、兎に角現在の中国東北地区の南端大連市郊外星ヶ浦・老虎灘といった美しい海岸で父に連れられて泳がして貰ったのが最初で、小学校五年生の頃には六年生だけの速泳組に特に加わって星ヶ浦から黒石礁まで5キロぐらいでしょうが完泳したのが“泳げたな”といった実感のあるものでした。六年生になって大連市内25校の小学生大会があり、当時日本最大の企業と云われた満鉄本社が大連にあった関係で神宮競技場にも劣らない程の運動場があり、その隣接の公式プールで平泳第2位の賞状を頂いたのが最初に競技に出た時の記憶です。中学校では水泳部に在籍していましたが、低学年ではどうしても鳴かず飛ばずで、中学四年の時成城尋常科に転校して間もなくホッケー部に在籍していました。

高校一年になった或る日山口八郎先輩から一寸どすのきいた様な声で『おい！お前ボロのキーパーをやれよ！』と云われて、当時のホッケー部のキャプテンとも話しをつけておられたのでしょ、夏季シーズンから入部した次第で、インターハイや関東学生大会等にもその後出場する事が出来、本当に幸いであつたと思っています。ホッケーの方は大学まで都合7年間続けた関係で冬はホッケー部、夏は水泳部（勿論ホッケー部の夏の合宿もありましたが）、それに陸上競技部から声がかゝって三校対抗定期戦等に出場、砲丸投・ハイジャンプ・ブロードに参加する等、グラウンドとプールの間を何回か往復するといった仕儀で、そうした事では本当に青春を満喫していました。そうした中で、冒頭に述べた竹尾先輩のあの時の一投は終生忘れ得ないものゝ一つになっている訳です。

そう！あれは関東学生水球リーグ三部の最終戦で

優勝を決定するものでした。記憶が定かでないの間違っている処があればお許し願ひ度いのですが、成城はその頃は高校なので皆十代、従ってオリンピック選手もいる二十二、三才の大学の連中にはかなりべくもなく三部にいた訳です。それでもあの年は強将竹尾主将の許に弱卒なして、勝進んで最後に中央大学と優勝を争う事になりました。これに勝てば若年チームでの二部進出も夢ではなく、ファイトを燃やして試合に望んでいました。リーグも最終戦となり、秋風も立ち始めていたかと思ひます。試合は当時の神宮屋外プールの飛込台下の深い補助プールで挙行されました。1対1か、3対3か、忘れましたが兎に角互角で決勝点が決まらず延長戦に入り、三度ゴールサイドを入替えて行っても尚決着がつかず、夕日も西に落ちんとして審判団も打合せを行い、之で得点が無ければ試合終了にするといった情景でした。考えて見ますとそれまで泳ぎをやつて来ていた私も水球のキーパーとなつたのはその夏が初めての事で、山口先輩から巻足やら防禦の基本を懇切に指導して頂いたものゝ無我夢中で立ち泳ぎをしながら味方の得点機を待っていました。

延長戦が三回も続いて愈々これでおしまい、優勝は預りかと言つた本当に数秒前になつた時、常時先頭を切つてフォワードで戦つていた竹尾先輩が、この上は得点を取られまいと考えられたのか何時の間にか素人キーパーの私の手の届く様な直ぐ斜め前に来ておられました。確か竹尾さんが声をかけられて山口さんがバックパスされて竹尾さんがボールを受取つたその瞬間でした。ニョッキとおへそが見えるくらいまで水中から仁王立ちになつた竹尾先輩、乾坤一擲、エイ!!と掛声もろとも大ロングシュート。それは今でも、スローモーションのビデオを見るが如く眼に焼付いていますが、ボールは味方のゴール近くから空を切つて敵ゴールキーパーの右前でワンバウンド、そのままスルスルと右ゴール隅に滑り込んで行きました。

あゝ!!何と云う事が起つたのでしょ、西日を浴び乍ら我々のスーパーマンがやつた!!信じられないと云うか、一瞬敵味方とも忘然自失。しかしその直後すぐに鳴響いた試合終了のホイッスルに夫々我に帰つて、私達はプールサイドに這い上ると共に手を取り合つて飛び上つて喜んだ事は申すまでもありません。二部との入替戦つて？あゝそんな事どうで

遺稿

旧高第13回 S16年卒業 浜田 収

今年は高等科へ進級して待望のインターハイに出場出来ると思ってはりきって練習をした。其の結果競泳に100米と200米で自分の記録を破って3着と2着に入った事は実にうれしかった。これも一重に鈴木・中村両先輩ならびに諸先輩のおかげと深く感謝する次第であります。

しかし9月の7年制の試合にはインターハイで気をよくしていたのであまり練習もせずに出場して見事失敗した。この事は非常に先輩諸氏に対して又自分自身にも悪い事をしたと思っている。

思うに今年の一年の僕は龍頭蛇尾であった。来年こそは今年の良を取り悪を改めて龍頭龍尾にしようと思う。

この原稿は、浜田さんが昭和13年、ご自身で書かれたものです。

も良いじゃありませんか、竹尾先輩のあの一擲は我々の奇跡の一擲でもあったのです。あゝ青春のあの一投よ!! 永遠の一投よ!!

キャプテンであった御本人はどんなお気持ちでいらした但我々若輩部員の感慨とは異っていたでしょうが、私達が分っていた事は帰りに新宿に立寄っての祝杯ビールに竹尾先輩達の財布がからっぽになった事でした。そう、その時のメンバーを特記する必要がありますね。

竹尾(3年)、山口・守田(2年)、浜田・内山・穂坂・中村・松浦(1年)

思い出しても本当に良い方々と交遊頂きましたが故人になられた方もおられます。合掌。その頃の一部の方のプロフィールを記して置きます。

『快助さん』私達は竹尾主将をこう呼んでいました。文字通りの九州の快男児。お父様から禅の指導でもあったのでしょうかね、『そもさん、喝!!』等とプールサイドで腹に手をあて、禅問答で迫って来られたり、あれが人間の腹を作るといった事だったのでしょいか。免角インターハイでも自由型で大方トップ入賞といった事で我々の心を振り立たせて下さった方です。

『山八さん』山口宗樹先輩の弟さんで戦時中海軍航空隊で亡くなられた由ですが、叔父様の山口多聞中將が航空司令長官で、ミッドウェイ海戦に月光に沈む空母と最後は一人となって運命を共にされた事は史実に残る有名なお話しです。山八さんも本当に水泳部に青春の情熱を傾けた方で、竹尾さんの後の主将をされましたが、シーズンの始めと終りには守田先輩と共に卒先してカルキ臭いプールの清掃にデッキブラシでごしごしやっておられたのが今も目に浮びます。

『中村三ちゃん』彼とは高校三年間クラスメイトでしたが正式名は中村勝秀君、高校から入学した秀才です。有名な教育者の御息で本当に真面目な人柄、自ら心身鍛練を目的とした入部だったのでしょ、誰かがやらねばならない猛練習後に入浴する事になる風呂焚きを自ら志願してやっていました。風呂屋の三助と花川戸助六を文字って、しょうか、自ら“花緒三助”と称して焚き口に裸足では危いので花緒つきの下駄を履いて黙々と煙の為に目に涙を浮かべ乍ら懸命に風呂を焚いておられました。勿論自分も1000米のロングを引いた後にはです。全く頭の下の人がいたものです。

我々の後には丹沢・君塚・八尋の名選手その後輩に福田君等誠に優秀な連中が頭に浮びますが、こゝでは割愛させていただきます。

現役的好漢諸君、青春に悔いなき様、又水泳部生活での交友を大切に五十一年の歴史ある水泳部の光輝ある一ページを更に飾って下さる様健闘を祈っています。

思 い 出

旧高第14回 S17年卒業 君塚 英男

私達が高等科3年になったのは、昭和16年。大東亜戦争がその年の12月に始ったのですが、支那事変がおこって既に4年近くたっており、戦時色がかなり濃くなって来た頃でした。

キャプテンは丹沢君だったと思います。春の関東学生水球リーグは、例年通り神宮で行われたが、夏のインターハイは中止になりました。9月の7年制

高校も関東学生も行われなかったと思います。大学の卒業が12月にくり上げられた年で旅行にもそろそろ制限をうけはじめた頃です。この頃の日記も写真も戦争で殆んど焼失してたり、はっきりしません。3年の時は、水泳の試合を大々的に行うといった雰囲気ではなかったのでしょう。従って、高等科3年の時の水泳部の生活は余り記憶がありません。

学園の一番奥に金網にかこまれ尋常科、高等科とわかれた部室があり、部員以外の脱衣所も十分に広くあり、50米に25米のプールは、当時は立派なもので、尋常科から7年間春先から晩秋迄通ったわけですが、当時はフンドシがよくて、水球用のパンツで色も紺か黒で、練習の合い間にスエットスーツとかトレパンを着ていた人は、殆んどなく、シャツを着るか、タオルを腰に巻く位で、プールのまわりの草むらから飛んでくるアブだかブヨだかにさされても余り気にしなかった様に思います。

プールサイドの便所がどういう訳か水が入り、おつりがくるので、これをいかにさけるかを竹尾さんや、戦死された山口八郎さん等が、色々と工夫話をされていたのを覚えています。

何か高等科3年頃の事を書くようにと山口さんに言われたのですが、前に述べた様に記録がなく、記憶も余りなくて、大した話は出て来ません。私の高等科3年は、運動等が出来なくなるうす暗い時期の初めにあたるわけで、余り良い思い出がありません。

忘れ得ぬことども

旧高第3回
S6年卒業 鈴木忠夫

僕が昭和3年成城高校に入ってからプールの完成と興津夏期水泳学校の寄宿舎の完成が夢であった。その夢を小原先生の御厚情と諸先生の御協力により、3年になった昭和5年に両方が完成し、その年水泳部が確立されはじめてインターハイに出場出来た。このことは、今もって大いなる感激であり忘れ得ぬことである。

当時としては50米プールは全国的にも数少なかった。そのプールの有効な活用と整備、興津生活の充実、将来の水泳部の基幹となる若者の養成等に全力を傾けようとはげしい情熱と愛着を持ったものである。

しかし、その一つの興津がなくなってしまったのは、かえすがえすも残念であり、大いなる損失であった。来し方を考えると、楽しいこと、苦しいこと、喜び、悲しみ、笑い、涙、が走馬燈のように思い浮び、又消えてゆく。なかでも興津での思い出は、昭和4年から昭和10年迄コーチとして参加したことである。その充実に尽したし昭和11年以後も暇をつくり、夏期学校が中止になった昭和17年迄興津へ行くのが義務の様に思え楽しみであった。

興津生活をよくしようと脚立、ターニング台、自製のコースロープと次ぎ次ぎ完備させた。いかだかなかったのをそれを寄附したり、将来はヨットをうかべ皆んなを喜ばせようと、大きな夢をもっていた。が、今はない。さびしきかぎりである。我が浩然荘のあったところは、興津の町からトンネルを抜けた守谷と云う海岸地区にあった。海岸の全長は800米程の入江で真中に狸島(本名:渡り島)があり、真白な砂浜と碧い海が好対照をなしていた。砂は細く砕けた貝殻の粒が多く、水に飛び込みかきまわしても、殆んど濁らず、人家も少ない。海岸で泳ぐ人は我々だけだったので、十分に練習も出来、自分達の海のようなであった。

浩然荘は、岬の中程の峡谷の凸凹の激しい岩盤を土止めして埋め立ててつくられたのである。平地に出来たのが一番大きく、8畳が3つと風呂場・炊事場があり、主として尋常科1年生が陣どっていた。崖の上に右と左に一軒づつ建っており、向って左側に先生とコーチが宿泊する習しであった。毎回の行事は、僕の水泳発達史に書いたがいろいろの逸話もかぎりなくあった。思いつくまゝ二〜三を書きとめる。

いつの年かは忘れてしまったが、自由時間に狸島附近でさざえやうにをとって来て、我々のところへ来て見せてくれた。当時、動植物の内田先生がうにを割って色々説明したあと、このうには、皆がたべては腹をこわすからと云うがはいいか全部御自分がたべてしまわれ、みんなをあっけらかんとさせてしまわれた。センペイ(山口八郎)や三郎(鈴木勝太郎の弟)は若いのに水泳はうまいが、茶目でこわがりだった。夜コーチの部屋につれて来て、蚊帳の中で怖い話をし、昼間から用意してあった軒の間に綱を渡し、白い布をつるし左右に引いて、おぼけが出たといってびっくりさせたこともあった。進級試験

の前日位になると、みんながコーチが入浴しているところへやって来て、皆で背中や腕を流してくれたことがあった。関取が禪かつぎに洗わせていたのもこんなもんだったかと、今思うとほほえましい。試肝会をやり、山道のあちこちに先生やコーチが隠れていて脅すのであるが、恐いのか、癩癩玉を手にも持ち、ところかまわずなげつけるので、危なくこっちは恐くなったものだった。その頃自分は、すぐ色が黒くなるたちだったので、興津の町で黒ん坊大会があるのを聞いて来て、皆で自分の身体を焼くため、日蔭においてくれず真黒になり、案の定、優勝し女優から大きいチョコレートをもらったのを憶えている。それから色が黒いのでシャム王子の称号をもらってしまったのである。が毎回行っている内にシャム皇帝となり、興津の浜に君臨したのも昔話である。名づけ親は内田先生だった。

興津の夏期学校が終わったあと、コーチ、高等科の部員や先生家族が夏を過ぎたものであった。ある夏水泳部員達と勝浦の水泳大会へ出場し、全種目入賞し、全賞品をせしめたことや、海辺でのあわいロマンスなどあるが割愛する。水泳部が確立された年昭和5年(旧制3回)で忘れてならない人物に真野国夫、三橋達郎がいる。真野は私と共に水泳部を築きあげた一人であり、三橋は泳ぎが早くインターハイに出場した時、白井誠と共に大いに成城にこの人ありと名を挙げてくれた。次の年(旧制4回)では、長與俊一、白井誠、河野貞二、杉浦紀雄がいる。長與、白井はプール、興津寄宿舎完成のため共に協力してくれた仲間であり、その後も水泳部の発展に力を尽してくれた。河野貞二は、興津で私とコーチとして後輩の育成に尽力してくれた。杉浦はマネジャーとしてやってくれたが、喘息持ちで早く亡くなった。次の昭和7年(旧制5回)では、元気者の笠原泰三(旧姓佐久間)や中村徹雄、長與謙二(長與俊一の弟)などをなつかしい。中村はずっとあとまで水泳部水泳会の話し相手だった。

以上の人達では、真野、深水以外戦死や病死で誰もいない。冥福を祈ろう。旧制第6回に鈴木勝太郎、内丸正三、寺中廉、姉齒仁郎、河野貞三(河野貞二の弟)がいる。鈴木勝太郎は同姓であり、兄弟にまちがえられしたが、兄弟以上に公私つきあい、水泳部のことをよく語り合いながら現在にいたっている。彼は背泳が速く高校1年の時、全国学生競技大会の

50米、100米で2着に入賞し、当時監督コーチをしていた僕に、そのメタルの内1個を渡してくれた思い出がある。今でも水泳部の色々の記念メタルと共に現存している。内丸はひょうきん者で、水球の時もひょうひょうとして皆はプールこじきと呼んでいたと思う。寺中は興津では好色家としてならしたので、彼一流のやり方で人気者であった。

昭和9年(旧制7回)では河村秀利、森清、波多野雄二郎、酒巻敏雄であるが、河村、波多野は夏期学校終了後寄宿舎に来て勝浦や興津の浜に遠征し、道端あらしの如く賞品を集め廻った仲間である。館野はマネジャーとして非常に熱心であったが、宝塚が好きであった。私といっしょに、宝塚の舞台撮影をしに行っただけのものである。

酒巻は昔、中西と云い、興津夏期学校では忘れられない仲間であった。助手、コーチとして非常に熱心な真面目な人柄である。今はいない。さびしい限りである。

昭和11年(旧制9回)には大西真博、中村俊平、守田譲二、那須一彌がいる。昭和10年は大西真博、昭和11年は中村俊平にそれぞれ主将をやってもらったが、二人共真面目で責任感が強く、私との連絡もよくとってくれた。当時のプールは、故障箇所が多く、その修理に先生、先輩、現役が一体となりその案件にとりくんだものである。これ以後は興津の夏期学校で教えた者がそのあと水泳部に入り熱心に水泳部発展につくしてくれた人達である。昭和12年(旧制13回)には山口宗樹(マンベイ)、柴田正和、伊藤泰二、神田己季男、深水正保、平岡邦充、伊藤和年と多士済済であった。時の主将は山口であり、真面目に水泳を愛し、次の隆盛の基礎をきずいてくれた。次ぎの昭和13年(旧制11回)には、竹尾快助、入部辰市、森美秀がいるが、竹尾快助(カイスケ)は、関東7年制高校水上競技大会が昭和8年開催されるや、当時尋常科だった彼は慧星の如く現われ記録を塗りつぶしてくれた。その後短距離界の雄として君臨し、昭和13年、彼の主将の時、インターハイ全国大会に出場し全国6位、関東学生水球2部昇格、関東学生水上競技大会1部昇格と、黄金時代をつくり後輩の養成に力を尽してくれた。その時センベイ(山口八郎)は2年であったが、水泳部の雑務をよくやってくれた。主将竹尾と協力して、私の水泳部10年史発行計画に尽力してくれ原稿を集め、印刷

にながす直前まで行ったのであるが発行されなかった。その理由は忘れてしまってさだかでないが当時のいくつかを50年史にのせることにした。昭和14年（旧制12回）は、山口八郎、守田謙三、須賀重興、木村和一郎がいる。山口はやんちゃ坊だったがフェイトマンであり、努力家であり随分水泳部につくしてくれた。あの壮絶な戦死も彼らしいと頭がさがる。

昭和15年（旧制13回）位になるとよく憶えている名前が少なくなって来る。この年の主将は浜田収であった。興津からよく知っていたいたづら坊主だったが中途退学をしている。それなのに水泳会会員にってもらって有難い、と私のところへ手紙をくれたのを憶えている。昭和16年（旧制14回）には憶えている人に丹沢章浩、君塚英男がいる。丹沢が主将としてその後コーチとして彼は尽力してくれたし私のところへ、その性格を示す様な几帳面なしっかりした字で手紙やら葉書で相談して来てくれた。今に水泳部や水泳会が続いているよき仲つぎだと感謝している。このあとは八尋章、小沢貞一郎、知っている位で記憶は薄らいでゆく。その後は成城水泳会の再建に力をつくしてくれた前に述べた鈴木勝太郎、山口宗樹、竹尾快助、丹沢章浩以外忘れてならない人に福田竜三、山本勉、藤沢靖弘がいる。

こう書きつづってゆくこの50年の間に多くの仲間が戦死や病死をされた。このことを考へると感無量である。



7年制ボロ大会で後列左より 清水 八尋
前列左より 小沢 山田 高木 福田

ほうふら泳法

山田寿一の追憶

旧高第18回
S20年卒業

小沢貞一郎

黄金時代のスタートは彼の優勝から始まった

山田寿一又の名を「無頼」、何故無頼なのかさだかではないが、しぐさにいさゝか無頼なところが見受けられたからであろう。教室でついた渾名ではなく水泳部でつけられたものであることは間違いない。

山田寿一の泳ぎは下半身が水に沈み、深いところでバタ脚がゆらゆらしている。上半身はストロークのたびに右に左に揺れる。水面に対して斜になった体の軸が絶えずくねくねとしているので誰いうとなく「ほうふら」と呼ばれた。真に風彩の上らない泳ぎである。

このように最初からくづれっ放しの泳ぎであるが彼の頼もしいところはこのまゝでどこまでも泳ぎ続けるという点である。

昭和17年の7年制高校水泳大会——当時の我々にとってこの大会がシーズンを通じてのメインイベントであった——の最初の決勝種目は、僕の記憶に誤りがなければ山田寿一の出場する四百米自由形であった。然しこの種目では同じ山田でも成蹊の「山田悠久」が本命とされていた。

四百がスタートした時、僕は控え室にいた。僕自身の出番が迫っていたからである。そして会場から流れるスピーカーに耳を傾けていた。

「百米における途中計時、第4のコース山田君成蹊、時間……。」

とスピーカーが報じた。百のラップは成蹊の山田がとった。そして又、

「二百米における途中計時、同じく第4のコース山田君成蹊……」やっぱり悠久が強い、無頼はダメかなと僕は感じた。

その頃プールでは山田寿一が成蹊の山田を追っていた。そしてプールサイドでは成蹊の連中がほうふらを見て大声で叫んでいたという。

「あいつは大丈夫だ、もうすぐ浮く。」

然し、始めからくづれて、最後まで浮かぬのが山田ほうふらの身上だ。しばらくしてスピーカーが叫んだ。

「三百米における途中計時、第6コース山田君成



城、時間……」かっと熱くなった。控え室にいた成城の連中が一せいにどよめいた。山田頑張れ!

山田寿一は遂にそのまま泳ぎきった。控え室に伝令が飛んで来た。

「山田がやった」。

僕達はドッと喚声をあげた。

続いて山田寿一本人が控え室に飛び込んで来た。

「優勝したぞ、オレ優勝だ」。

頭も顔もまだ濡れていた。彼の丸い顔面がいっばいに笑み、彼は両手をかざして踊りながら叫んでいた。細い目がくしゃくしゃになっていた。

彼は苦戦で強敵を破り、僕達はこれで勢いづいた。これが7年制制覇の始まりであった。翌昭和18年7年制連続制覇、以後戦争激化のための中断はあったが昭和21年戦後初のインターハイ全国優勝と黄金時代が続いたのである。

もう1つ、山田寿一は水球では我々のフォワードだった。戦い振りは狡猾にして巧妙振り向きざま鋭いシュートをした。彼は昭和18年からキャプテンを務め、その顔のごとく丸い人柄でよく信望を集め

た。いま、青春の日を共に過した山田寿一君のエピソードを記し、謹んで哀悼の意を表します。

思い出

旧高第18回 S20年卒業 浅田忠平

小生は中学部一年より水球部に入会致した。訳で当時全国中等大会が神宮プールで開催され100米自由形で出場させられ何分にも部員が少人数為と思われませんが、スタート台に立って出場選手を見ますと何とはるか上の御兄さんばかりでこちらが子供のようでその恥しさは今でも忘れません。高校も水泳部に入り7年制高校の試合にも毎年出場致し又、水球の時はフォワードをやらされ君塚さんによくどなられた事等なつかしい思い出です。キーパーは雨宮さんか森田さんでした。

シーズンオフには各自牛肉を持参しプールサイドですき焼き大会を致した事等、思い出も沢山あり本当に楽しかった青春が今よみがえる心境です。

ニックネーム

旧高第19回 S22年卒業 福田龍三

私が成城学園に入ったのはS15年で、当時は7年制高校とあって、尋常科(現中学校)が4年、高等科が3年で、成蹊、武蔵、都立、学習院及び東京高校と6校で7年制高校と云った。卒業がS22年で7年間成城学園にお世話になったと云うより7年間プールにお世話になったと云って良いほどで、同クラスの友達より、水泳部の仲間の方が仲が良かった。成城在学7年間のうち、6年間は戦争中で、何もかも不足していたが特に食料不足はひどかったが、今から考えるとあの食料不足の中で良く練習したものだと思う。吾々の主な試合と云えば、7年制高校競技会で今の様な全国的な大会は少なかったが、結構緊張して試合に出たものである。S16年の7年制高校尋常科低学年(1~2年)競技会で優勝してから、S17,18年の尋常科競技会、S19年7年制高校技競技会と敗戦の後のS21年の大会に優勝した。S21年には全国高校水上競技会、いわゆるインターハイが戦後初めて復活し、東部大会は二位になったが京都で行われた全国大会では優勝した。インターハイで成城が優勝したのは他の運動部を含めて初めてではないかと思う。当時のメンバーを紹介

すると

- 丹沢章浩監督 「丹チャン」名前からついた。
- 小沢貞一郎(平泳) 「貞坊」名前から。
- 山田寿一(自由型) 「ぶらい」一見無頼漢風であったが大学卒業後3~4年で尿毒症で死亡 名キャプテンだった。
- 村瀬泰一(自由型) 「かぶ」顔が燕に似ていた。
- 中井陽作(背泳) 「陽作」名前から
- 平子 良(自由型) 「たまご」或は「ゆでたまご」頭形が似ていた。
- 天野誠夫(自由型) 「馬琴」講談の先代宝井馬琴のファンだった。
- 田中義昭(自由型) 「愚猿」臼井先生命名で赤い顔をして愚かな行動をしたから、成城中知らない者がなかったニックネームの傑作である。大洋漁業専務であったが残念にも52才で胃癌で死亡した。
- 平野卓彌(自由型) 「ぶり」魚の鱗の様に丸く太っていたが戦後に結核で死亡。
- 上野孝人(背泳) 特にないがやせていたので「がいこつ」と云われていたかもしれない。戦後結核で死亡。
- 南 正寿(平泳) 「南さん」名前から。
- 高橋和男(自由型) 「わお」和男をわおと皆が呼んでいた。
- 津田淳一(自由型) 「つんだ」いかにもつんだと呼びたくなる感じ。
- 玉置 至(自由型) 「玉置さん」名前で呼んだ。
- 山本 勝(平泳) 「おとん」多分名前が勝でとんかつと呼ばれていたが短くなり「おとん」になった。



平出照道（背泳） 「マルキ」ははっきりした意味はわからないが、多分「まるで××」のようになるから。

村瀬竜也（自由型）「竜公」兄弟が多かったので名（平泳）前になった。肝硬変で死亡。

村瀬友三郎（自由型）「友公」

会田 豊（背泳） 「キョチャン」漫画フクチャンのなかのキョチャンに似ていた。S35・36年頃事故で死亡。

新井倫夫（平泳） 「パシャ」トルコの首相ケマルパシャに似ていた。

小畑 明（背泳） 「おば公」おばQではない。

戦時中の部生活

旧高第19回 村瀬 泰一
S22年卒業

我々が水泳部の生活を送った時期は、昭和15年より21年の7年間。開戦から終戦とほぼ同時期であった。色々部生活の中で先輩、后輩諸氏に御世話になりましたが、特に白井、森、星野各先生及コーチとして丹沢、小沢両先輩に御指導を賜った。

我々同期のグループはキャプテンの故山田寿一（ブライ）福田竜三、中井陽作、平子良、山本勝（オトン）故田中義昭（愚猿）、平出照道、津田淳一、高橋和男、玉置至、天野誠夫（馬琴南正寿）故会田豊、村瀬泰一（カブ）等。

全員成城小学校尋常科よりのつき合いであり、低学年時代より夏休には合宿し、コーチも熱心であったお影か、どちらかと云うと真面目に練習をし7年間に殆んど優勝した仲間であったと思います。

戦中戦後の思い出が色々多いのですが、食料不足が一番思い出され、低学年合宿中にたった一片の胡瓜の漬物で愚猿と馬琴が八杯も食べた事。終戦直後のインターハイ全国決勝で京都に米持参で遠征した宿のおかずが、茶がらの佃煮。優勝した晩町に出たけれど食べさず店は1軒もなく、玉置君の紹介でお茶屋に行き、宇治水を5.6杯食って空腹を満たそうとした事等、ともかく、腹がへって泳げなかった時代であった。

だがこの時代にも7年制インターハイ等で優勝する度に何とか酒（焼酎が主であるが）を工面しては、

思いつくまゝ当時のメンバーをならべたが亡くなられた方が6名もいる。いやつばかりで本当に残念でならない。こゝにあらためて御冥福をお祈りする次第です。

色々思い出もあるが、インターハイで優勝した時の京都の新聞の切抜きがあったのでつけ加えておく。

とりとめのない事をかきましたが、もしも少年時代に戻れるならば昔の仲間と一緒に成城学園に入り水泳をやりたいと思う。



白井 誠 作品

白井、星野両先生をかこみ喧嘩をしたり、ゲロをはきながら祝盃をあげていた。

当時はプールの管理も部員が中心でプール掃除も年中行事であった。昭和17年4月16日、米空軍ドゥリットルのひきいる（B-24）が日本に初めて空襲した日グラウンドにブラジをかつぎプール掃除に向う途中、数機のB-17が頭上を飛んでいったが、皆で「東宝撮映所も大がりのロケをやるわい」と云いながら、高射砲の音で初めて気が付く始末。プール掃除の最中愚猿と竜公が突然なぐり合ひのけんか。（この両故人は数度に渡りけんかをしているが、水泳部にとってはガードマン的人物であった。）

いつの年か思い出せないが揚水のモーターが壊れ、練習不能となり、品川の明電舎迄暑い夏に皆で歩いてリヤカーをひっぱってモーターを借りて往復した後水をはって1/3位から練習した事。インターハイ東部予選の前日水が腐って泳いでいると食用蛙の大きなオタマジャクシが口に入って泳げなかった事。昭和19年5月25日の空襲でプールに焼夷弾が50発も入っていた事等思い出はつきない。

我々ももはや55才、35年前の部生活は、社会情勢も激しかったが、苦しい練習の中にも楽しい思い出として、いつ迄も残る事と思います。

私達の時代の成城水泳部

旧高第21回
S24年卒業 村瀬友三郎

私は、昭和11年尋常科入学と同時に、当然の様に水泳部に入部した。

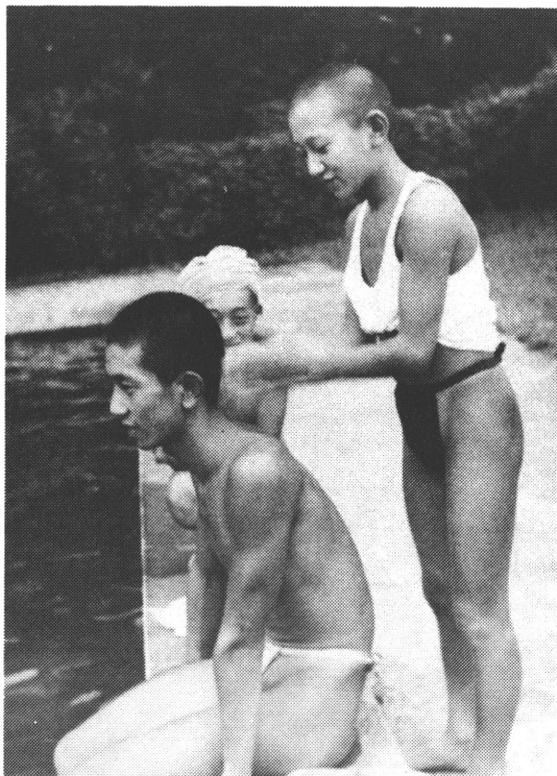
小学校4年の時からいわゆるプール乞食として、毎日プールに行っていたし、兄2人も水泳部だったので、ごくあたり前に入部した訳です。尋常科時代の前半はまだよき時代であり、興津の海の家、7年制低学年大会と楽しい思い出があります。しかし、3年、4年になると動員されることが多くなり、特に4年の時はほとんど部活動は中止しておりました。私は、幸い学園中の剣道場を改築した急造の工場で働いておりましたので、この年も毎日泳げました。

当時、成城の町にはすでに敗れていたドイツ人が多く住んでおり、その内の1人が毎日の様に泳ぎに来ていたものです。もっとも毎日の様に艦載機による空襲があり、日中はあまり泳げなかった様におぼえています。

戦後は、高校に進み、インターハイが中心となりました。我々の2年先輩は、インターハイ史上最強と言われたチームであり、21年の戦後第1回のインターハイで東京から24時間もかけて京都に行き、あっさり優勝しました。この事は、その時代の方がくわしく書かれる事と思います。

さて、花の22年が卒業するや、三年は山本オトンさん、私の兄の竜ちゃんの2名であり、2年に私、小畑、新井パシャ等で前年に比してなんとも見おとりするチームです。しかし、インターハイの関東予選では、それでも4位ぐらいにはなりました。この時水泳部ではない、松浦竹雄さんなどの応援を得た様に思います。

その年、山本オトンさんの兄さんが慶応の水球の先輩でして、その関係で、慶応のプールに、何回か練習に行き、かなり腕を上げ、インターハイの水球では東京高校につき2位となりました。この時のメンバーは、G K山本、B W新井、小畑、H B田島、F W村瀬竜也、村瀬友三郎、C F北村でありました。



成城プールにて 丹沢先輩と

そこで、競泳は東京高校、成蹊高校にはかなわないが、水球ならなんとかかなりそうだと、次の年は水球に明け暮れた訳です。

先づ、春のインターカレッジでは、大学生を相手にオールシャットアウトで2部優勝をし、インターハイも全くあぶなげなく勝ちました。この年は、秋のインカレトーナメントで優勝した慶応大学に4-2で敗れた他は、負けしらずでした。この年のメンバーは、G K南、B W新井、小畑、H B田島、F W村瀬、入来、C F北村でした。この年は、水球の練習で泳ぎこんだ為か、インターハイの関東予戦ももう少して全国大会に行けそうになり、又、7年制大会では優勝しました。又、インターカレッジでも東大より上位になるという活躍をしました。特に7年制大会では、1位は1人もいなかったですが、アイダのキョチャン、山崎サランが、立川さん等の大活躍で見事優勝出来ました。この時が、私の水泳部生活の中で1番うれしかったです。

この年を最後に旧制インターハイの時代は終わりました。そして次の年から、新制の時代がはじまります。

ここで一言いわねばならぬのは、それから2年監督をした、私の兄の竜也の指導です。それはもうムチャクチャなスパルタトレーニングをしたのですが、それがその後の成城の水球の基礎をなしたと信じております。私自身、その後高校、大学の監督を長年する事となります。

いずれにしろ、成城水泳部を通じ、私は貴重な体験をし、すぐれた友人に出会えた事を感謝しております。

水泳部と私

旧高第21回
S24年卒業 新井 倫夫

昭和22～23年頃の記録が殆んどないとのこと。35年も経っていますので記憶も不確実ですができるだけ思い出せることを書いてみます。

私は泳げるようになったのは遅い方で小学校の4年の時に小プールに先生に放り込まれてやっと泳げるようになりました。

水泳部に入ったのは尋常科1年(昭和17年)の

夏興津の臨海学校から帰って来てからです。当時は毎年尋常科1年生はほぼ全員が興津の海へ行きました。その時水泳部の3.4年生がコーチ役として行き先生の手伝いもしましたがなかなか楽しいものでした。

1年生のなかに、ものになりそうなのがいれば水泳部に引っぱり込むのも目的の一つだったわけで、私もそんな1人で興津にいる間に水泳部に入ることになったように思います。

その年の尋常科のキャプテンの小沢さんに引っぱられ丹沢さんのコーチをうけて平泳一筋でした。この年は七年制の尋常科低学年大会(現在の中学1.2年)に出してもらいましたが結果は記憶してません。

翌18年は山田キャプテン以下尋常科最強の年でしたが私もシーズン初めから練習に加わり常に福田さんの頭を後から見て泳ぎました。この年七年制尋常科大会の優勝は感激でしたが私個人としては低学年大会で100と200ブレで大会新記録で優勝できたことが今でも大事な思い出になっています。

戦争がだんだん激しくなりましたがそれでも昭和19年は練習もし、七年制大会もありました。あま



前列左側より 村瀬(竜) 田島 立川 中列左より 新井 小畑 北村
後列左側より 入来 南(正) 村瀬(友) 会田 富田



り良いことがなかったのかこの年の事は思い出せません。

昭和20年は我々も工場へ行き終戦をむかえ水泳部としての活動は何もできなかったと思います。

戦後第1回の旧制インターハイ優勝のあと2年上の強力先輩たちが卒業して22年のシーズンをむかえるとき村瀬友さんの発案だったと思いますが競泳では勝てないからボロで行こうと云うことにして22年のシーズンは初めからボロ主体の練習としました。

たしかこの年からインターカレッジのボロのリーグ戦が復活し1部リーグでやったと思うのですが記憶があいまいです。翌23年は慶応に練習に行き6月のリーグ戦までには相当強化され負けたのは早稲田、慶応、日大の3校だけだと思いますので1部の4位だと思います。水連にも記録が残ってないとのこと残念です。

メンバーは、村瀬友、北村、田島、岡田、小畑、新井とGK南、だったと思いますが、脱けてる方がいたらごめんなさい。

慶応と早稲田には歯が立ちませんでした、日大は当時ボロ部はなく競泳の古橋、橋爪、浜口、真木といった連中が練習もせずに出て来るのですが体力と泳力でねじふせられた感じです。

私はFBで浜口にマークしましたがはねとばされてどうにも止められなかったものです。

インカレのボロが春と秋の2シーズン制だったように思うこと、1部校は上記の他は明治、立教、東高、成蹊だったか今となると自信がありません。

競泳の方もインカレに登録されていて誰も出ない訳にいかず何名か予選に出ましたが勿論決勝に残ることはできませんでした。飛び込んだとたんに隣の足が顔の処にある悲哀を感じました。

この年は我々旧高3年で成城での最後のシーズンでもあり旧制での七年制大会最後の年となりました。高等科尋常科とも優勝はできませんでしたが善戦したと記憶しています。私個人は100、200ブレとも学習院の長君に勝てず2位だったのが残念でした。

24年のシーズンは新高の監督をやらせてもらって、幸い甲子園の全国大会準優勝した。選手の皆がよくガンバッタ結果だけど、私にとっては大変幸運な経験をもたらったのだと思います。

夏の高校野球の監督の話題など聞くと大変苦勞もしておられるし立派だと思います。当時の私は若かったしチームや一人一人に対する筋の通った考えもなかったのに全国大会の決勝戦までチームが戦ってくれ得難い経験をさせてもらえたのは不思議なくらいです。

戦争の前後の恵まれない時代でしたが私の水泳部8年間には、興津のこと、合宿、優勝、祝勝会のこと、京都でのインターハイ、甲子園のこと、正確なことが思出せないながらもいろいろのことがいっぱい詰っていることを痛感します。

プールの思い出

旧高第22回 立川慶男
S24年修了

毎年シーズンになるとプール券を送ってもらい、懐しさを感じていますが、日頃OBとしては何もしておらず申し訳なく思っています。

当時の思い出としてはやはり大変であったことが頭に浮びます。

まずプールの掃除。デッキブラシでコンクリートの底や壁にこったりとついた汚れを落としカルキを塗りつけるのが水入れ替えの度の大仕事。読いて徹夜でモーター小屋の見張りをしながら何日もかかってプールの水を一杯にすることも一仕事。夜半に近

くの畑からこっそり失敬して来て食べた西瓜の味が格別であったこと。プールがやっと一杯になる頃、水が井戸水のためすぐに緑色になって我々と一緒によく食用蛙が泳いでいました。

先輩はみんな、典型的な成城っ子でやさしかったけれど、プールサイドで青大将を焼いて、泳ぎが速くなるからと食べさせられたことや小さな木のお風呂のぬるいお湯で体を暖めては、シーズン始めの冷たい水の中で練習したことが記憶に残っています。

旧制高校最後の我々としては何の楽しみもなかった戦中、戦後の時代のエネルギーを水泳にぶつけることが出来たのは辛いことも多かったけれど、本当によかったと思います。

思い出の人・思い出すこと

旧高第22回 南 正保
S24年修了

快男児・愚猿

「愚猿」の名付け親は白井先生と私は本人から聞いている。マラソンでトップで走っていたのに途中で木に登り、柿をとろうとして落ち、足を痛めて一位になれず、白井先生からつけられたのだそう。

愚猿こと田中義明君は陸軍大将、内閣総理大臣・田中義一の子息だけに豪胆なところがあった。これもその一つ。彼は北大に受験に行った時、カンニン

グをした人を見つけ、休憩時間になぐって階段から突き落としたという話。丁度教授が通りかかったため教授会で彼を入学させるかどうかで問題になった由。(これも本人から直接聞いた話)。

ところで話はもう1つ昔にさかのぼる。戦後間もなくの頃、プールもあまり整備されてなかったが、こよなくプールを愛する水泳部の連中がいつもたむろしていたものだ。そんな時、よくヨタ公(チンピラヤクザ)共が「オイ、泳がせろ」と肩をいからせながらやってきたものだ。我々は連中がやってくると小さくなってふるえ上がったものだが、こんな時我が愚猿様は敢然と立ち向って喧嘩を買って出た。そして決して負けなかった。度胸のよさと腕力の強さはまことにたのもしかった。或る時などはこの連中を服のままプールにたたき落としたりしたものだ。我々はただ速巻きにして見守るばかりであった。

そんな彼だが北大卒業後大洋漁業に入社、若くして専務にまでなったのに数年前に病を得て他界されたのは本当に惜しまれる。

迷センター・バキン

天野誠夫君のことを何故バキンというのか私は知らない。彼とは今でも一緒にゴルフに行ったりしている永いつき合いである。

旧制高校時代だからこれもかなり昔の話。学園祭の催しの一つだったと思うが文理科対抗の水球をやったことがある。バキンも私も文科だったので同じチームで、私はゴールキーパーだった。試合もたけなわになった頃、突然彼がボールをうばってドリブル、我がゴールに迫ってきた。私は一旦キーパーの私にパスして戦列をととのえるのかと思ったところ、やにわに自陣に強烈なシュート。味方のゴールを敵のゴールと間違えたのだった。確かこの一点で文科が負けたように覚えている。



ストーリーキングの元祖・ツト公

村瀬四兄弟と言えは型やぶりの人間揃いで水泳部で知らぬ人はいない。私は1番上のカブ(泰一)と同級だった。二番目がタツ公(竜也)、三番目がトモ公(友三郎)でツト公(功)は1番下である。タツ公は一生分の酒を飲んで早折したのは残念だ。

今日はツト公の話。彼は私が福岡に在勤中丁度日本航空の福岡支店旅客課長として福岡に赴任してきたので飛行機の切符をとってもらったことが何度かある。そのツト公のこと、いつ、どこでだかははっきり覚えてないが昭和20何年かの七年制高校の水泳大会だったことは間違いない。25米のプールだったので成城でないことも確かだ。彼はプレストの選手だった。号砲一発飛込んで何度か折返してトップで泳いでいたがあと僅かのところで「ふんどし」がほどけてしまった。(当時は皆ふんどしだった)。彼はそのふんどしを泳ぎを中断してコースに引っかけた。見ていた我々は一瞬ギョッとした。ところが彼はそのまま泳いでトップでゴール。当然ゴールからもどってコースに引っかけたふんどしをとりに行くと思いきや彼はヒョイとゴールから上ってフルチンのまま一目散に控室に走り込んだのには二度ビックリ。

ところでプレストは言うまでもなく左右対象で泳がなければいけない競技。泳法違反は明らかで失格となるとばかり思っていたところ、全く偶然に丁度その時審判が誰も見ていなく、アナウンスは「只今の結果、一着村瀬君……………」。

終戦前後のことなど

旧高第23回 津田謙二
S24年修了

成城の尋常科に入ったのは昭和19年、押せ押せムードだった戦争も局面がかわり、敗色ただよいはじめた頃である。

軍国主義はなやか、というより一色に塗りつぶされたような世相の中で、小学校にすら、ピンタと称する私的制裁が行なわれるようになり、それを当然視するような雰囲気さえただよひ、軍人が威張り散らし、英語は敵性語として排除される、そんな時代だった。

成城に入ってまず驚いたのはピンタがない事だっ

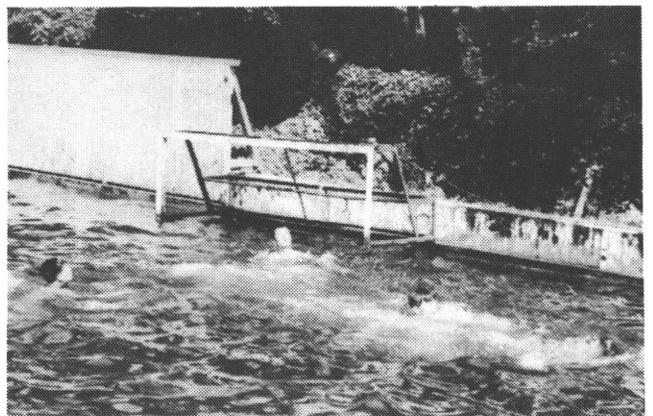
た。それに水泳部では先輩の事をさん付けでなく、渾名で呼んでいる事だった。愚猿……白井先生がつけたというが今でもひどい渾名だと想う…などと四年も下級生が呼ぶのだから、他の学校ではちょっと考えられない雰囲気である。しかし、どの様な渾名であれ、それが年月を経て、風化すると、そのうち渾名の意味はいつしかうすれ、最後には親しみのこもった言葉になる事を知った。だが校風は変わらなくても戦争は学校を変えた。体育館はゴム工場となり、横に大きな煙突が立ち、物資運搬のため母の館から体育館の横までトロッコのレールが敷かれた。

プールに居る時、P-51の機銃掃射を受けて、あわてて小プールの角にかくれたこともあった。今想うと子供というのは環境にすぐ適応する。敵の戦闘機が射った弾丸が土煙をあげて等間隔に地面に吸い込まれるや否や、その機銃弾を掘り出しに行った者がいた。仲間に見せて誇りたかったのであろう。

そして終戦、これまでの価値がすべてひっくり返り、目標を失って何をしてよいかわからない我々にとって、泳ぐことは唯ひとつの情熱を傾けるに足る対象だったといえよう。当時の水泳着といえば六尺褌だった。いくら物資がないといっても布の切れはし位はあった。用具がいらない、という点では水泳位耐乏生活向きのスポーツは他にあるまい。

もっとも七年制の試合に一人妙な褌をしめている男がいた。見かけぬ模様である。よく見るとそれは鯉のぼりを褌にしていたのであった。

今と違って殺菌剤など仲々入手できなかったから





プールの水は入れ替えて一週間から十日で濁りはじめ、最後の頃は真緑の中で泳いでいたものである。だからプール掃除といえば壁にこびりついた藻類をブラシでこそげおとすことだった。プール掃除のために水を抜くと、最後の頃にいつの間にかプールに住みついた亀が姿をあらわす、等ということは始終あったし、米軍の管理下にあった神宮プールがいつまでも透明で底まで見えていたのをまぶしいような想いで眺めたものである。

プールを数日間干しあげると今度は注水である。水道はないのでプールの横の井戸からポンプで汲みあげる。しかし井戸の容量は少ないので数時間ポンプをまわすと水が出なくなる。暫くして井戸の水位が上がるのを待って又ポンプをまわす。モーターとポンプをつなぐベルトの張りを調節したり、そこにぬる滑り止めのベルトワックスを古ロウソクと松脂を溶かしあわせてつくるようなこともやった覚えがある。

早くから泳ぎたい我々にはプールへの注水を徹夜でやる事になる。部室に数人泊り込んで何やら語りあいながらポンプをまわし、水がなくなると時々水位の回復を調べに行っては又スイッチを入れる。

食量難で誰もが腹をすかしていた。そこで…当然といっでは何だか近くの畑に野菜などを盗みにゆく。当時プール前の川は巾数米、魚も多くいたし、シジミも住んでいて、上流の右左はすべて畑だったから、

本当に田舎だった。僕は暗闇の中を独りでトマトを取った、いや盗った記憶がある。西瓜は番人がいたので難しかった。盗る時よりも持ち帰りが難しい、というのであの小川に流して下流のプールの前で拾いあげた頭の良い人がいた。と聞いた事があるが、それが誰かは覚えていない。

時には怪談で夜を過した。グラウンドにはたしか一ヶ所だけ、体育館の少しプール寄り、女学校をへだてる道のおりてきた辺りに電柱があるだけであたりは真暗だったはずだ。その夜、ポンプ小屋に行って部室に戻ろうとしたら、プールの前の橋の辺りで青白い火が舞っていてゾッとした。人玉か、と思ったのである。よく見ると人玉にしては光が小さい、何のことはない蛍だったのである。

昭和21年、食量難と混雑する列車にもまれて京都で行なわれた戦後第一回のインターハイに先輩達が出掛けた。尋常科三年の私も連れて行って貰った。宿舎は智積院、すくすくと伸びた松にかこまれた宿坊に泊り、毎日三高のプールに出掛けた。インターハイ史上最強といわれただけあって多くの種目で一位をとり、観客も初日は、成城ってどこの学校や、と言っていたのが最終日になると子供達までが、成城強いな、と言うようになっていた。

中でも印象に残っているのが二百米平泳決勝である。福田龍三氏がトップ、プールサイドの皆が三分を切るか切らぬかで総立ちになっている中を最後の

数米をバタった。つまりバタフライに切り替え、三分を切ったのである。二分五九秒台と記憶しているが、今、手許にはその資料はない。当時の平泳ぎの定義は身体は左右対称の姿のまま泳ぐこと、とされており蝶泳という独立した種目はなかった。今のバタフライの足、ドルフィンキックはまだ世の中に現われていなかった。福田氏も平泳ぎの足でバタったのである。

私が成城に在籍したのは旧制高校一年まで……新制に切替わる過渡期で我々は旧制一年でそのまま新制大学か新制高校三年に移行したのである……の五年間、戦後の混乱のさなかであったため、合宿というものをしていない。いやできなかった時期なのだ他にさしたる楽しみもなかったから、とにかく毎日のようにプールに出掛けた。八月などは合宿と同じ量の練習をやって帰宅、夕食をとりながら寝てしまうような時もあった。

中でも、村瀬龍也氏のスパルタ式コーチは忘れられない。ある年、プールに注水中に大雨が降ってあのプール前の小川が氾濫したことがある。この様なことは毎年1~2回起り、グラウンドは一面の水びたしとなるのだが、その年は溢れた泥水が井戸に流れ込んだ。当然プールの水は褐色、はっきりいうと泥の色になる。試合の前かなにかでどうしても水を入れねばならなかったのだ。流石に誰もがプールに入るのをためらった。うすら寒い小雨の日であった。皆、顔を見合わせ、誰も泳ごうとしない中を、村瀬龍也氏は何も言わずに飛び込んだのである。先輩に泳がれては、我々も知らぬ顔はできぬ。結局全員が飛び込んで練習が開始された。背中で、後ろ姿で教える、というのが、まさしくその通りであった。

当時の部室は図の通りである。

我々はよく部室にトグロを巻いていた。練習がなくとも日に一度は部室に顔を出した。壁にこんな落書きがあった。

いつか又逢うて

もとの契りを暖ためん

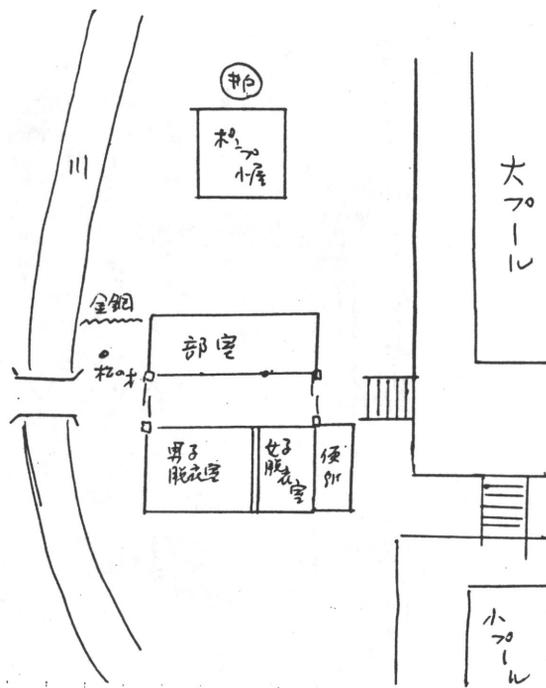
梅も桜も散り果てて

柳はすでに深緑

人はあかねど往く春を

いつまでもここに留むべき

この最後にオツンとサインがあったように思いますが如何でしょうか。



それに先輩の残したノートに電報が貼りつけてあり文面はイツコウラポロレオキツバカとなっていました。あれは誰が打ったのでしょうか。

私達の仲間については又誰かがくわしく書いてくれると思うが一年上は、北村、南、入来、田島とlevった強力メンバーが揃っていました。

私と同期では村瀬功(平泳ぎ)森洋(自由型)岡田良元(背泳)が活躍し、桑野、平、山口(ホーフ)等も居た。七年制の尋常科で活躍した立花は線の細い、やせ型の、スタミナという言葉と程遠い感じの文学青年だったが、ひとたびプールに入ると物凄くデッドヒートを繰り返りひろげてプールサイドにいる人の手に汗握らせるゲームを展開したものであるが惜しくも早世した。後に妹さんが水泳部に入り、全日本選手権の決勝に進出している。

一年後はこれまた多士済々で、ドカタと上原、寺田、門田、小林、等が眼に浮かぶ。上原は水球の試合前の練習で、シュートがゴールのネットの破れ目を抜けて、うしろにあったテントの支柱をたおし、大会準備中の役員を驚かせた事がある。

さきにも述べたように、我々は敗戦前後の混乱期に、学制改革のさなかに水泳部に籍をおいていたので、じっくりと学生生活を送ったとは思えない。しかしその中でも水泳部での日々は辛いとはいっても楽しかった。成城の五年間、遅くて不器用で、結局

はレギュラーになれず、卒業まぎわに、他校との水泳の練習試合の、それも後半だけ、お情けで出してもらったような私でも、皆は、とにかく練習だけは人並みにやった。それだけのことを認めて仲間に入れ、未だに親しくさせて載っている、これは非常に有難いことだと思う。

そして、成城の水泳部で、とにかく最後までやめずに練習を続けた事が、結局は教育大の水泳部で、卒業まで水球の全試合に出場するという、その基礎になったのだと思うと、改めて自分の人生に対する成城水泳部の五年間の重みを感じないわけには行かない。

いま、最も複雑な気持ちで試合を見るのは、それぞれ後輩にあたる成城対筑波の試合である。それも両校共に強者同志として相まみえるのは嬉しい。片方、又は両方が弱いというのはやはりさびしい。

敗戦後の混乱期に、それなりの情熱の対象として選んだ水泳、水球、その思い出をいつまでも鮮やかにかつ楽しいものに保ちつづけるためにも、現役の方々の青春の思い出として、何にもかえ難い貴重な財産としてこれからの人生の中に心に残って行くに違いないからである。

トリの思い出

旧高第23回 村瀬 功
S24年修了

立花君の死があまりにも突然だったので、その悲しみを驚かざるを得なかった。しかも僕が最後に“トリ”に会った時はいつもと変わったことなく一緒にプールで泳いだのであるから今もって、本当の様な気がしない。“トリ”とは柳組の時から一緒であり、又共に水泳部に入った。だいぶ秋らしくなって人影もない淋しいプールに行くと、何故か彼の思い出が次からつぎへと浮かんでくる。そして、今更に彼の死がいたわしくなってくる。

元来、彼は運動が大好きだったが、体が弱くて、おまけにゼンソクに悩まされていたので、いつも少し弱々しかった。

体力の弱かった事で“トリ”は水泳の練習が相当重荷であった事は、知っていたが、いつもやる時はもくもくとして実行していた。

“トリ”が水泳部に入った当時は、明るいほがら

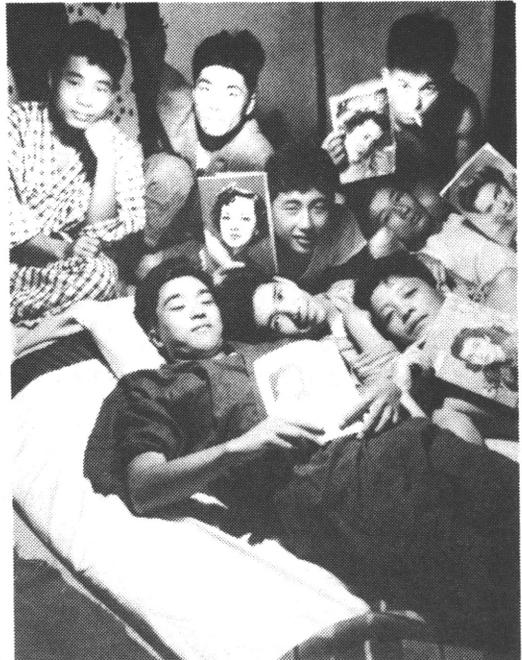


左より前列
岡田 良元
村瀬 功
木村

後列
山田 寿一
金井 正之

かな性質の持主であったが、体が他の連中に比べて弱々しかった。

しかし、その春、一度に入った部員は四十人位であったが、秋まで残った者は、結局六、七人であった。他の連中は、皆練習のつらさに耐えかねてやめてしまったが“トリ”は残っていた。そしてその秋の七年制低学年の試合には、メイン・ポイントゲッターとして活躍したのである。そして、体的にも驚く程進歩を見せていた。彼の春から秋にかけての努力を称賛しなかったものはなかった。それ程彼は真面目だったのである。雨の日も風の日も彼は元気な時は、きっと現われた。特長のある口と目を大きく開いて懸命になって泳いでいた“トリ”がなつかしい。それも今は永遠に見えないが、彼の残したファイティング・スピリットは永遠に後輩の手に残せ



中列の右側が私(村瀬 功)です。

るであろう。

一面、彼は非常にデリケートな感情の持主で、無邪気なところのある憎めない奴だった。ひどく動物が好きだった事も忘れられない。殊に、好きだった鳥のことなら何でも知っていた。

数々の思い出を残して亡くなった彼に厚く同情する。彼の元気の好い顔を今一度見たいのは人情である。これが運命というものならば、深く“トリ”の冥福を祈ってやまない。

遺稿

八百米自由型決勝

旧高第23回 立花 幸一

「只今の結果を申し上げます。

1着 莊司君 東京高校……時間1分22秒零……」高等科の百米背泳決勝は終わった。

「次は尋常科の八百米自由型決勝であります。選手諸君はたゞちにスタート台にお集まり下さい。」と云ふアナウンスを聞いて、「さあいよいよだ」と思ひながらスタート台のそばに行く。

第1のコース……青山君 成蹊高校

第2のコース……立花君 成城高校

第3のコース……豊島君 成蹊高校

第4のコース……三樹君 学習院

第5のコース……藤巻君 都立高校

第6のコース……平子君「弟」 成城高校

第7のコース……入来君 成城高校

コースナンバーの発表を胸がときどきする中で聞いた。私は強敵の豊島と青山にはさまれている。この事は一方では前半ついて行って後半飛ばす——と云ふ私の作戦には好い場所だが、競ると強い豊島である事を考えるとあまり好い場所ではない。

予選では1番だった——青山は私よりおそい等と考へて心を静めようとするが、心は静まるどころかともすれば、——

豊島は四百米では入来も負かした——豊島は体が大きい——等と云ふ考へが湧いて来て、尚更胸はときどきする。

「ピー。」笛は鳴った。スタート台に立つ。「立花頑張れ。」「立花しっかり。」の声が起る。

こはばった顔を無理に微笑ませて、味方の方を見た時、「用意。」の声が響いた。きっと、ゆらゆら



7年制高校尋常科
優勝杯をかかえて
S21. 5. 23逝去

している水を見つめる。

「ドン！」ピストルが鳴った。

25米は軽く泳いだ。調子は好いようだ。青山、私、豊島と殆んど3人は並んで行った。

私は作戦通り、百米まではむしろ抑へて青山の先行を許して行った。

2百米。豊島は私を二米程はなした。

青山は私より五米位おくらしている。

四百米——豊島は七米位先行している。「さあそろそろ詰めよろうぜ」と425米のターンの時、誰かがどなってくれた。私もその積りだったから、少しづつピッチを上げて行った。

六百米——豊島に先行される事二米半。入来は計画通りトップだろうかと心配になる。

七百米——後百米、豊島に半米ばかりとなる。必死だ。七百二五米の前で遂に並ぶ。

ターンで又半米抜かれる。七百五十米の前で又一緒。ターンで抜かれる。

カランカランとラストの鐘が鳴っている。

七百七五米一緒にターン。並んだ。手がコースに引掛って癩だ。

私も彼も顔を見合せているので全く必死だ。最後の25米は全く一緒に並んで泳いだ。一寸でも差をつけようとするが駄目だ。

ゴール。顔を上げると、「わあつ。」と云ふ歓声が増えて来た。まはりを見ると驚いた。総立ちである。引張り上げて来て呉れた南さんに、「勝った？」と聞くと「分らない」と云ふ。手と足の筋肉が痛い。

「入来は？」「1番。」(二米程私より早かった



そうである)上ると山本さんや福田さんが来て、「好かったぞ。好かったぞ。頑張ったね。」と云って労って呉れる。結果は殆んど同時なので分らない。と誰もが云ふ。

「惜しかった。」「もう一寸はなしていたらなあ」と皆に言はれながら着替へてプールへ出ると、果然結果発表だ。

「只今の結果を申し上げます。

- 1着 入来君 成城高校……時間13分8秒0
 2着 豊島君 成蹊高校……時間13分11秒9
 3着 立花君 成城高校……時間13分11秒9

矢っ張り。と思った。直後はそんなに感じなかったが、タイムは同じなのに……と思ふと、やはり口惜しかった。

尚アナウンスは続く。

- 4着 青山君 成蹊高校……………」

(注) この競泳記は去る9月2日、成蹊プールに於て行われた第12回関東7年制高等学校水上競技大会の記述である。

『一着』

『第五のコース 立花君』

アナウンスされぬ 我が名
 ドキリ ドキリ 心臓の響
 ビー 笛はなる
 心をしづめて スタート台に立てば
 プールの水は青く ゆらめく
 ドン ピストルの音
 左右は水煙 群がり進む50米
 必死の四百 敵は落伍し
 上る歓声 我勝ちぬ
 『一着 立花君 成城高校』
 アナウンスされる 我が名

1946・6・9

『病にふして』

病にふして 思い出す
 すこやかな日の 楽しさを
 プールの水の ゆらめきと
 白いコースに 立つしぶき
 一着たりし我が為の
 拍手の音も思われて
 ああこの体 体さへ
 そう思う目に ふと涙

1946. 11